

学位論文抄録

No Associations of Psychological Symptoms and Suicide Risk with Disaster Experiences in Junior High School Students 5 Years After the 2011 Great East Japan Earthquake and Tsunami
(東日本大震災から5年後の被災中学生において精神症状と自殺リスクは被災体験との関連は認めない)

川原 一洋

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経精神医学

指導教員

竹林 実 教授

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経精神医学

Abstract of the Thesis

Background and Purpose:

Natural disasters such as earthquakes can cause substantial damage and trauma, especially to children. The aim of this study was to examine the effects of disaster experience on psychological symptoms, suicide risk, and associated factors in junior high school students 5 years after the Great East Japan Earthquake (GEJE). The hypothesis of this study was that psychological symptoms and suicide risk of junior high school students are associated with disaster experience.

Methods:

A cross-sectional survey consisting of questionnaires and face-to-face interviews with students at two junior high schools in Ishinomaki city, Miyagi Prefecture, Japan, about psychological symptoms, disaster situations, and their current environment 5 years after the GEJE was conducted. In total, data from 264 (117 boys [44.3%] and 147 girls [55.7%]) students were analyzed.

Results:

There were no associations between disaster experience and PTSSC-15, DSRS-C, and SCAS scores. Those with evacuation experience and still living in temporary housing had significantly higher scores on the Oppositional Defiant Behavior Inventory (ODBI). Of these students, 29 (11.0%) were considered to have suicide risk 5 years after the GEJE. The presence of depressive symptoms was the only factor related to suicide risk; no associations were found with sex, post-traumatic stress disorder (PTSD) symptoms, or other factors reported in previous studies, including disaster experience.

Conclusions:

Disaster experience was not associated with psychological symptoms (PTSD, depression, anxiety) and suicide risk in junior high school students 5 years after the GEJE. The suicide risk appears to be the same as that in the general population in Japan. However, attention should be paid to externalization problems and depressive symptoms, an important suicide risk factor, even 5 years after the GEJE.

学位論文抄録

[目的]

大地震のような自然災害は特に子どもたちにとって大きな心理的影響を与える。本研究の目的は東日本大震災で被災した 5 年後の中学生における精神症状と自殺リスクおよびその関連因子を評価することである。今回調査するにあたり、「被災した中学生の精神症状と自殺リスクは被災体験と関連している」との仮説をたてた。

[方法]

東日本大震災から 5 年後の中学生における精神症状、被災体験、現在の生活状況についての横断的な調査を行った。対象は、宮城県石巻市の 2 つの学校に在籍する全ての中学生 514 人のうち、研究に同意をした 330 人(64%)である。本調査は宮城県石巻市の 2 つの公立中学校で対面式で行い、診断面接、自記式アンケートと親記入式アンケートを行い、欠損データを除いた合計 264 名(男性 117 名、女性 147 名)のデータを解析した。研究にあたり、国立研究開発法人国立国際医療研究センター倫理委員会での承認を得ている。

[結果]

被災体験と 5 年後の中学生の子ども版災害後ストレス反応尺度(PTSSC-15)、バールソン児童用抑うつ性尺度(DSRS-C)、スペンス児童用不安尺度(SCAS)スコアに有意な関連はなかった。従って、被災した中学生の精神症状と自殺リスクは被災体験と関連しているとの仮説は否定された。一方で、避難経験がある中学生、現在仮設住宅に居住している中学生は反抗挑戦性評価尺度(ODBI)スコアが有意に高かった。また、29 人(11.0%)の中学生に自殺リスクがあると認められ、その関連要因は、自然災害で一般的に報告されている女性、心的外傷後ストレス障害(PTSD)関連症状、その他の要因ではなく、抑うつ症状のみであった。

[考察]

被災体験と 5 年後の中学生における精神症状との間に有意な関連がなかった要因としてはいくつかの可能性が考えられる。一つは、子ども自身が有する回復力(レジリエンス)や様々な社会支援が精神症状の回復に有効であり、長期間経過した時点では有意な結果が出なかった可能性がある。実際、同地域における宇佐美らの先行研究と比較すると、PTSD 症状は 1 年後と比較して 2 年後、3 年後、5 年後と経時的に回復し、抑うつ症状は 2 年後に回復し、3 年後、5 年後は横ばいであったことはこの可能性を支持した。仮設住宅に居住している中学生が、外在化障害である反抗挑戦性症状が多い点は、本人自身の環境的な問題だけでなく、親の経済状況やメンタルヘルスなどの社会要因の影響の可能性も考えられた。自殺リスクは 11.0%であり、さらに直近 1 ヶ月の希死念慮、自傷、自殺企図のいずれかに該当する中学生の割合は 3.4%であり、これは同年代の一般コミュニティと同等の割合であったことから、自殺リスクは増加していない可能性が考えられた。しかしながら、自殺リスクとの関連する唯一の要因は抑うつ症状であることが明らかとなり、中学生の抑うつ症状は自殺防止の観点から注目すべき症状と考えられた。

[結論]

東日本大震災から 5 年後の中学生において、被災体験は PTSD、抑うつ、不安といった精神症状、自殺リスクとの関連はみられず、自殺率の増加も認めなかった。しかし、これは 5 年の経過で PTSD 症状および抑うつ症状が様々な要因で回復してきた経過である。一方で、外在化の問題や自殺リスク因子である抑うつ症状については、東日本大震災から 5 年後を経過しても、なお注意が必要であると考えられた。